

主人公と悪人との関連

DAVID COPPERFIELD 小論

諏訪間 裕 子

I

ディケンズがみずから 'my favourite child' と呼んだ中期の代表作である『デイヴィッド・コパーフィールド』 (David Copperfield) の面白さは、この小説の主人公と悪人たちとのかかりあいを解くことによって、いっそう複雑なものになる。主人公とデイヴィッドが、ステアフォース (James Steerforth) とヒーブ (Uriah Heep) に示す、一見いわれのないように思える愛と憎しみの感情は、この両者のかかりあいの糸を手操るための重要な手がかりである。

この小説は、主人公が世の中の苦しみを経験していく過程を通して、次第に精神的成長を遂げるという *Bildungsroman* の流れをくんでいる。一方では、どんなにみじめな境遇にあっても、真面目に努力し、刻苦勉励の道を歩めば、きっと出世すると説く、ヴィクトリア朝特有の人生の指導書的色彩も濃い。このように、教訓的要素が多いにもかかわらず、この小説があまり読者から反感をもたれないというのも不思議なことである。それにはいろいろな理由が考えられるであろうが、第一には、主人公をとり巻く悪人たちの役割に負うところが大きい。悪人であるステアフォースもヒーブもリティマー (Littimer) もデイヴィッドの *Bildungsroman* 的な話の筋に対して、パロディーとなってデイヴィッドの人生に影を投じている。そのみか、その根底

においては、彼らのもつ感情と同質のものが主人公の性格の一部にひそんでいることも見逃すことはできない。では、この主人公と悪人たちとの類似性は一体何を意味するのであろうか。この類似性こそ、主人公と悪人たちを結んで離さない愛憎の源であるし、その本質こそ、この小説の面白さの鍵となろう。

デイヴィッドは、小さい頃から常に、自分はいじめられているという恐怖感にとりつかれていた。「すぐれた能力を持ち、観察力も鋭く、鋭敏で、熱心で、繊細で、肉体的にも精神的にも傷つけられてしまうような子供」であったデイヴィッドは、大人の虐待行為や彼を無視した行動に対して、ひどく敏感である。デイヴィッドが幼いときに、母クレアラ (Clara) が新しい夫マードストーン (Murdstone) を迎えるようになるが、マードストーンとその姉のデイヴィッドに対する仕打ちは、「哀れなひな鳥を狙う、二匹の蛇の魔力」のようであるという。また、マードストーン姉弟が主張の根拠としている「堅固さ」(firmness)について、デイヴィッドは次のような感想を述べている。

彼らの言う堅固さとは、虐待に対する別名であり、この二人の中にある陰うつで、傲慢な悪魔の気質に対する別名でもあると、私は明らかに自分勝手に解釈していた。(4章)

デイヴィッドは、家を離れてクリークル (Creakle) の学校 Salem House に送られ、そこでスティアフォースに会うことになるが、この学校でも、彼は同様な圧迫感にさいなまれる。家にいるときマードストーンにかみついたことから、学校の仲間の前で、「この者御用心、かみつきます」というブラカードを背中に背負わされてしまう。このときもデイヴィッドは、「私は、かみつく一種の凶暴性のある子供と

して、実際に自分自身が恐くなりだしたのを覚えている」と書いているように、彼を襲う異常な恐怖感、デイヴィッドの心から去ることがない。また、デイヴィッドは、自分から「みすぼらしい子供」(a shabby child) であるという意識を捨てることができない。相当に大きくなってからでも、デイヴィッドはステイアフォースの召使であるリティマアの前に出ると、彼のリスペクタビリティに比べて、自分は「あらゆる人間のうちで、いちばんの青二才で、いちばんの未熟者だと感じてしまう」のである。(I felt myself the greenest and most inexperienced of mortals.) その他さまざまな人間たち、当然彼に従うべき人々によって、デイヴィッドは、不当な扱いを受け、いかに自分が若く、世間知らずで、力のない子供であるかを思い知らされている。マードストーンの家から学校に送られる途中では、給仕にごまかされて、食事を全部食べられてしまい、その上金を多分に巻き上げられる。その他にも、大伯母の家に行く途中、荷馬車屋には泥棒扱いをされたり、荷物を全部取られたり、乗合馬車の馭車にはうまくごまかされて席を代えられてしまったり、いかけ屋には嚇かされて絹のハンカチを取り上げられるし、肉屋には挑まれて決闘を申し込み負かされてしまう。これもすべて、デイヴィッド自身が、若くて未熟だという意識から逃れられないためである。大伯母であるミス・トロットウッド (Miss Trotwood) の家から、サフォークの故郷に立派な身なりをして帰るときでさえも、例外にもれず、宿屋の女中や給仕に対して、「悪いことでもしたようなこそそそした態度」(a sneaking and guilty air) をとってしまうのである。従って、「女中はどんなことでも私の意見には耳を貸さず、給仕人は私になれなれしくして、私の無経験なのに対して、あれこれと助言をする」のであった。デイヴィッドが結婚してからも、同様なことが起こる。

デイヴィッドとドーラ (Dora) の家庭で雇った女中や召使は、やはり彼らを主人らしく扱わずに、勝手気ままな態度をとり、主人の名前で借金をしたあげく、主人の時計を盗んで逃げてしまう。この事件について、デイヴィッドは、ドーラに次のように話して聞かせている。

「僕たちに伝染病があるのだよ。それで、まわりの人たちに誰でもうつしてしまうんだ。……そのために僕たちのところに奉公に来る者や交渉のある者たちは誰でも、甘やかしてしまうという容易ならぬ責任を負うことになるのだ。罪は一方ばかりにあるのではなくて、僕たちが自らよくなるために、ああいふ連中がみんな悪くなってしまわないかと、僕は思い始めたんだ。……僕たちは積極的にみんなを悪くしているのだよ。」(48章)

この言葉はドーラよりもむしろデイヴィッドにこそぴったりの忠告であるように思われる。小さい頃からいじめられ、虐待され続けてきたデイヴィッドは、自分は生来、弱く、若く、頼りない人間であるという劣等感にとりつかれてしまっているからである。そして、デイヴィッドの懐くこの圧迫感は、彼の周囲の悪人たちと同類の要素を彼の性格の中に作り出している。

II

上に見たような意識を持ち続けているデイヴィッドが、ステイアフォースのような人間に魅せられるのは当然のことであろう。「大そう沉着冷静で、上品な身のこなしをし、すべての点で(年令もその内も含めて)私に勝っている男」「ライオンのように勇敢で、寛大な気質を

持ち、立派で気高い男」—— これは、デイヴィッドが人々にいじめられる度に、こうなってみたくと潜在的に望んでいた性格であろう。

私は何ら利害関係や、利己的な動機によって動かされたのでもなければ、彼が恐しいという気持ちに動かされたわけでもない。私は彼を崇め、そして愛したのであるから、彼が認めてくれればそれで十分に報いられるのであった。(7章)

デイヴィッドの憧れの気持は、彼自身の性格と正反対な性格を理想化していくのだった。

私をおもちゃのように扱う、その思いきった彼のやり方は、彼がとることのできるどんな態度よりも、私にはいっそう快いものであった。(21章)

デイヴィッドは、「かわいく、おどおどしていて、ちっほけな」(pretty, timid, little) 自分の中に不足している部分を、ステアフォースの他を圧するような「優越性」(superiority) によって補おうとしたのである。一方、ステアフォースの方も同様である。デイヴィッドを「デイジー」と呼んで「自分の持ち物のように」かわいがる。(I feel as if you were my property.)

以上のように考えてみると、デイヴィッドとステアフォースが互いにいわれなく引かれあうのは、この二人が正反対の性質を持つ故であるように思われる。しかし、一見相反する性格ではあるが、彼らの性質の奥には同質のものがひそんでいる。この二人の性質の類似性は彼らの女性に対する態度の中に見つけ出せよう。デイヴィッドもステ

イアフォースも同じように、ろう人形のようなタイプの女性—エミリー、ドーラ、ダートル—を追いか求め、そして結果として、相手をすべて不幸にしている。(Q. D. Leavis は Dickens the Novelist において、このタイプの女性の原型をデイヴィッドの母クレアラに求めている。) スティアフォースはデイヴィッドの幼い恋の相手であったエミリー (Em'ly) をそれと知りつつ誘惑し、駆け落ちをし、捨て去るのであるが、ミス・ムウチャー (Miss Mowcher) はステイアフォースについて、デイヴィッドに次のように語っている。「あの男はあんたの邪魔をして、あんたを甘言でだましていたのよ。私はそれを知っていたわ。」デイヴィッドがいまだ気づかぬうちに、ステイアフォースはすでにデイヴィッドの中に、自分と同質の性向が存在していることに気づいていたのであろう。ステイアフォースにとって、デイヴィッドは初めは守ってやるべき小さな頼りない存在であったが、エミリーという共通の相手の出現によって、たちまちに打ち負かさねばならない強力なライバルと変わったのであった。

デイヴィッドはエミリーを失ってからドーラを愛するようになり結婚する。'Child-wife'であるドーラとの生活は、デイヴィッドにとって、幼い日のエミリーとの思い出そのままに、ままごとのような生活である。しかし、デイヴィッドは、ドーラと熱烈な愛情で結ばれたにもかかわらず、結婚後間もなく後悔するようになる。

私が出た幸福は、私がかつて漠然と予想していた幸福とは違っていて、そこにはいつも何か足りないものがあった。(48章)

デイヴィッドは彼の妻が人形のような女性であると十分に承知していたし、それ故に愛し結婚したはずであるのに、彼女を手に入れるこ

とができた瞬間から、ドーラの持たない面を彼女に求め始めるのである。

ときどきは、ちょっとの間妻が自分の相談相手であってくれればいい、私を支持し、私を向上させるために、もっと強い人格と目的を持ってくれればいいと感じたのである。(44章)

このようなデイヴィッドの心の変化は、ステイアフォースがダートル(Dartle)に示した冷淡さと共通性を持っている。ダートルはステイアフォースとの生活を次のように語る。

私は落ちてしまいました。——彼の子供らしい求愛で魅了されたのでなかったら、私もそうとわかったでしょうに——人形へと。彼の気まぐれにまかせて、捨てられたり、拾われたり、玩ばれたりする、退屈まぎれのおもちゃへと、私は落ちたのです。あの人が飽きたので私も飽きてしまいました。(56章)

デイヴィッドとドーラが結婚する前に、ドーラの父であるスペンロー(Spenlow)に結婚を反対されるが、その時デイヴィッドは思わず、「ドーラは私に誘惑されて、説得されたのです」(Dora was induced and persuaded by me)と答えている。

デイヴィッドがドーラの人格を作り変えようとして彼女を死に追いやった行為は——たとえそれが愛情から出ているとしても——ステイアフォースがエミリーやダートルを誘惑し、人形のように玩んだ末、二人を捨て去った行為と比べて、どれほど変わるところがあるだろうか。

デイヴィッドは、ドーラが死ぬと、アグネス (Agnes) へと次第に心が動いていく。アグネスはドーラとの結婚以前からずっと変わらずデイヴィッドを愛していた。しかし、デイヴィッドは彼女に無関心であった。それにもかかわらず、デイヴィッドはドーラを失った途端に、ドーラとの結婚を「誤った過去」(mistaken past)と簡単に片づけてしまい、アグネスへと思いを寄せる。このデイヴィッドの示す、女性に対する傲慢とも言える一面は、悪人ステアフォースのものと同類のものである。

デイヴィッドがステアフォースに示す愛着は、ステアフォースが彼を裏切ったということがわかってからも、変わることがない。自分の理想が踏みじられた後でも、デイヴィッドが彼を憎むことができないうのは、何のためであろうか。デイヴィッドはステアフォースが死によって自らの罪を償ったとき、次のように語っている。

私にとって、自然であることは、他の多くの人にも自然であると思われるので、私は少しも構わずここに書くのであるが、私とステアフォースとを結びつけていた絆が断たれたときほど、私はステアフォースを愛したことはなかった。……もし、彼と顔を合わせるものがあつたとしても、私は一言たりとも彼に対する非難の言葉など口に出せないだろうと信じている。

(32章)

ステアフォースはデイヴィッドの想像力の中に、一種の運命的な理想として植えつけられており、デイヴィッドの心の奥の性格の一部として、彼の中に存在している。別の言い方をすれば、デイヴィッドは、ステアフォースの弱さの中に、自分の弱さとのアナロジーを見

出したからである。「経験こそないが何にかけても若い道楽者」(young libertine in everything except experience) と呼ばれるデイヴィッドは、自らを「放蕩息子」(prodigal son)と呼ぶステイアフォースの悪行を通して、自身の悪の要素を知らされたのだ。それ故に、彼はステイアフォースを拒否できないのである。ステイアフォースを否定することは、自分自身を否定することにも通じるからであろう。

一方、デイヴィッドがドーラを「作り上げよう」(form her mind)として教育する態度は、相手の性質や弱さを理解しようとしなない点において、マードストーンがデイヴィッドの母親に対してものと類似している。デイヴィッドは妻の教育について次のように述べている。

私は全くふと思いついたようにして、有益な知識とか健全な意見とかを断片的に彼女に教えるようにしていた。私がそれを言い出すと、まるでそれが爆竹でもあるかののように、彼女は飛び上がるのであった。どんなに偶然のように私が小さな妻の心を作り上げようと努力しても、彼女はいつも私が何をしようとしているのか本能的に気がついて、非常な恐怖に捕われたのだった。(48章)

マードストーンは、デイヴィッドの母に対して、「私は無経験なうぶな人間と結婚して、その人の人格を作ってやり (forming her character)、今まで欠けていたしっかりしたところ、断固としたところをその中に幾らかでも吹き込んでやろうと思った」と語っている。この悪人マードストーンの教育もデイヴィッドのドーラに対する

教育も、教育をされる側の二人のか弱い女性の眼には、同類の厳しいものと映ったに違いない。教育に耐えられなかった二人の死が、そのことを物語っているようだ。幼い頃デイヴィッドはマードストーンの 'firmness' をどんなに恐しいと思ったか知れないし、そのために母が死んだということも、それによる悲しみも忘れてはいないだろう。しかし、デイヴィッドの行いは、皮肉にもその憎むべき行為と同質の効果と結果をもたらしたことになる。主人公と悪人との類似性をこのように暗示することで、作者は主人公だけ一人を気高いものにしてしまいがちなこの種の小説の持つ危険を排除している。ディケンズは、人物たちの持っている同質の部分がどのように互いに反応しあうか、その接触を楽しんで描いているように思える。

Ⅲ

デイヴィッドに影響を与えるもう一人の悪人、ユライア・ヒーブとデイヴィッドとのつながりはどうであろうか。デイヴィッドはユライアに初めて会ったときから、彼に対して特別な意識を持っているように思われる。

小さな丸い事務室にあかりが見えた。すると、私はユライア・ヒーブの方へ、たちまち引きつけられるような気がして、そちらの方に入っていった。彼は私にとって、ある種の魅力を持っていたのである。(16章)

このときには、デイヴィッドにも「魅力」(fascination) が何であるかということは、わかっていないが、次第にこの魅力がユライアに対する嫌悪の気持であったことがはっきりする。その気持は、ユ

ライアがデイヴィッドの部屋に泊って、二人だけで夜を過ごしたときに、頂点に達する。

眼がさめると、ユライアが次の部屋に寝ているのだという思いが、私の上に白昼の悪夢のように重くかぶさってきた。そして、まるで下劣な悪魔のようなものを家に泊めたかのように、重苦しい恐怖に襲われたのである。(25章)

デイヴィッドとユライアとを結びつけているものは、お互いに懐きあっている憎しみとも恐怖ともつかぬ気持である。では、彼らのこのような感情は、一体何を根拠としているのであろうか。それは、彼らの境遇が類似しており、同じ野望を持っているということで判明しよう。ユライアは自分の身の上をデイヴィッドに次のように告白している。

「父と私とは、二人とも少年のための給費学校で育てられました。そして母も同じように公共の慈善学校といったようなところで育てられたのです。そこでは、みんなが謙遜ということばかり教えたのですよ。朝から晩まで、他のことは教えなかったように覚えています。私たちは、こっちの人に身を低くしたかと思うと、あっちの人にも低くしなければならず、こっちでは帽子を脱がなければならず、あっちでもお辞儀をしなければならず、いつも自分たちの地位を心得て、身分の上の人たちの前では、身を低くしなければならなかったのですよ。」

(39章)

ユライアの少年時代は、デイヴィッドが人々からいじめられ、虐げ

られた日々と類似性を持っている。この類似性が彼ら互いの憎しみの根源なのだ。ユライアが「あなたは全く危険なライバルなのです。コパーフィールド坊ちゃん。いつもそうだったのですよ」と語るように、幼いときからの長い圧迫という共通の経験は、彼らを逆に 'dangerous rival' にしてしまったのである。

デイヴィッドは、いかなる境涯にあっても、常に心の中には、「大きくなったら学問のある立派な人になろうという希望」(hopes of growing up to be a learned and distinguished man) を持ち続けてきた。そして大祖母という良き保護者を得て、彼の希望は次第に実現に近づいていく。

立派な教育を受け、立派な洋服を着て、ポケットにはたくさん
の金を持って、こうして四頭の馬のうしろに腰かけていながら、あのいやな旅の途中で野宿した場所を探すのは、妙に興味
あることだった。(19章)

デイヴィッドは、「金の時計と鎖を下げ、小指に指輪をはめて、尾の長い上着をつけて、熊の油をたんとつけた」紳士になったのだ。しかし、ユライアは相変わらず、「コパーフィールド坊ちゃん、——コパーフィールドさんというべきですが、その方が自然に出てくるものでしてね」と、デイヴィッドに親しげにつぶやく。ユライアはこう言うことで、「デイヴィッドよ。ひと皮むけばお前も自分と同じ身分の生まれにすぎないではないか。」と威嚇しているかのごとくである。そして、デイヴィッドとユライアの憎しみの糸は、さらに複雑にからまっている。

デイヴィッドはユライアに初めて会ったときに、君はウイックフイ

ールドさんの事務所の共同社員になるだろうと言った。そして、アグネスについても、彼女は誰もが称賛せずにはいられない女性だと言ったことがある。ユライア自身が、デイヴィッドに、「あなたはこの私の卑しい胸に野望の火花を点じて下さった最初の人です」と言っているように、デイヴィッドの言葉によって、ユライアの野望の炎は燃え上がったのである。ユライアもステイアフォースと同様に、何とかしてデイヴィッドを畏にかけて、悪の中に引き込もうとするのであった。

この悪党め。一体どういうわけで、君の陰謀の中へ僕をひっぱりこもうとするんだ。このうそつきのごろつきめ。まるで二人がいっしょに企んでいたかのように、君はどんな顔をして僕に訴えるのだノ（42章）

ここで、ユライアとステイアフォースの悪が共通しているところは、二人ともデイヴィッドを利用して、デイヴィッドの愛する女性を自分のものにしようとする企むことである。ステイアフォースはデイヴィッドの初恋の相手エミリーを誘惑し、捨て去ったが、ユライアはデイヴィッドが崇め愛している女性アグネスを奪うことを野心の一つにしている。主人公と二人の悪人は、運命的に共存しているというべきか。

デイヴィッドはアグネスから、ユライアが彼女の父の共同経営者になろうとしていることを聞いて、「ユライアが？あの下等な卑屈な奴が、そんな高い地位まではい上がるんですかノ」とにくにくしげに叫ぶ。デイヴィッドもユライアも階級の壁を越えて上によじ登ろうともがいている、いわば同じ穴のむじなである。デイヴィッドがユライアを嫌うのは、自身の野望をユライアのような赤裸裸な形で見せつけられるのが、恐しいからである。そのために、デイヴィッドの無意識に

働く良心が、ユライアを自分から遠ざけようとする。その感情作用が彼に対する憎悪に他ならない。ちょうど磁石の同極が反発しあうようなものであろう。デイヴィッドがステイアフォース母子の感情の類似性を指摘して、次のように述べるところがある。「同じ性質の二つの影は、両極端に生まれたものよりも、いっそう協調するのが困難である。」デイヴィッドとユライアは、まさに「同じ性質の二つの影」(two shades of the same nature)であって、「心情的に同一人物」(one at heart)なのだ。デイヴィッド自身も、「私より奴の方が私という人間をよく承知していたのだ」(He knew me better than I knew myself)と内心思っているほど、ユライアはデイヴィッドの影であり、悪の分身となっている。それ故に、デイヴィッドを執拗に追いまわし、そのことを認めさせようとしているのである。

…… 彼は私とアグネスの近くをうろつくのを決してやめようとしなかった。私が階下に行けば、私のうしろにくっついていて。私とその家から歩き出せば、やはり私のそばにびったりとつきまとっていた。(25章)

では、ユライアのデイヴィッドに対する憎しみはどのようなものであるか。「コパーフィールド、私はいつもあなたを憎んでいたんだ。あなたは、いつも成り上り者で、常に私に逆らっていたんですからね」と言う言葉には、ユライアの憎しみがこめられている。ユライアの眼には、デイヴィッドは危険なライバルであるだけでなく、鼻もちならぬえせ紳士にも映ったのである。「立派な教育を受け、立派な衣服をまとい、ポケットにたくさんの金を持った」デイヴィッドを、ユライ

アは彼一流のやり方で軽蔑したのだ。言いかえれば、デイヴィッドの中にあるもう一方の隠れた要素、ステイアフォース的ダンディズムをユライアは嫌悪したのである。ユライアの 'umbleness' の哲学とステイアフォースの superiority の思想とは、互いに他を排するからである。

以上のように、ディケンズはデイヴィッドの周囲に彼のパロディとなるような人物を置いた。主人公を囲む悪人たちの悪は、デイヴィッド自身の性格に影を落とし、彼の潜在的悪を引き出している。しかし、主人公の中にみられるそれらの要素は、彼を悪の道に引き込むほどには強力ではない。むしろデイヴィッドの中にある悪人たちとの類似点は、彼の性格の中で悪に対する効果的な免疫体となって、彼の心にとけこみ、逆に彼の moral progress を助けているといえよう。別の言い方をすると、悪人との類似性は、デイヴィッドを恐れさせ、皮肉にも彼を正しく高い方向へと向かわせる道しるべとなっているのである。

ディケンズは、ユライアやステイアフォースを単なる主人公の競走者としてだけでなく、主人公の成長を助ける「外の力」として使っている。このような描き方は、ディケンズ特有のやり方である。ステイアフォースに対する愛着、ユライアに対するいわれのない憎しみは、主人公の内なる悪が悪人たちの悪に対して、無意識のうちに呼応作用を起こしていることを示している。ステイアフォースは自分の弱さをデイヴィッドの中に見、デイヴィッドはステイアフォースの外面的な強さに自分の理想の姿を映し出す。一方では、デイヴィッドは、ユライアの humility の中に自己の弱さを思い起こし、それ故に彼をしりぞけようとし、ユライアはデイヴィッドの中にあるステイアフォースの傲慢さを嫌う。このような関係の中で、主人公と悪人たちのつなが

りを描いているディケンズは、人間同志の懐きあう、愛と憎しみの間のあいまいな縁をとらえようとしているのであろうか。

デイヴィッドはこのような悪人とのつながりを持ちながらも、最後には精進して立派な作家となり、アグネスと理想的な家庭生活を送ることになる。デイヴィッドの持つ悪人との類似的性質は、彼の一生を傷うことはなかったのである。（しかし、少なくとも、悪人とのつながりは、彼を魅力ある主人公にしているのではあるが。）では、ディケンズが主人公を迷える悪人としなかったのはなぜであろうか。最後にこの疑問が残る。それは、この小説が自伝的要素が強いために、ディケンズ自身の生活信条に反することができなかつたためかもしれないし、当時の社会が求めている主人公にするには、やはり「自分が精力を費すことをするときには、できる限り精魂を尽してやる」人物にする必要があつたのかもしれない。いづれであろうとも、ディケンズがこの頃から主人公と悪人のかかりあいに、並み並みならぬ興味を持っていることは事実である。従つて、この小説の後に続く作品においても、われわれが引き続いて主人公と悪人との連関を解いていけば、ディケンズは、この作品では答え得なかつた疑問に対して、それらの作品の中で、われわれにその解答を与えてくれるにちがいない。